旅する乱歩　上諏訪編

丹羽　みさと

昭和十二年七月、乱歩が長野県の諏訪を訪れたのは、転地療養中の友人、横溝正史の見舞いが主な目的であった。とはいえ、乱歩が撮影した動画フィルムを見ていくと、諏訪各地を横溝と共に楽しんでいたことがわかる。

今回参考にしたこの動画は、大衆文化研究センター、旧江戸川乱歩邸でも長い間上映されていたものであり、「ああ、あれか」と覚えのある方も多いだろう。しかし諏訪のどこを訪れていたのか、その詳細に関しては検討されてこなかった。

そこで令和四年の秋に、諏訪湖エリアまちなか観光案内人協議会の藤森陽子さんの協力のもと実地調査を行い、乱歩の足跡を追った。同行者は小松史生子先生、小泉諒先生、野中健一先生である。藤森さんの案内に加え、真面目な趣味人でもある先生方の御助言が、今回大いに参考になったのはいうまでもない。

◆

昭和八年五月、横溝は突然血を吐いた。肺結核であった。心配した乱歩から、正木不如丘が所長を務める富士見高原療養所への転地療養を勧められ、横溝も気楽な避暑という心持ちで赴いた。しかし、約三か月の療養では、健康不安は解消されなかったため、昭和九年七月から不如丘の本宅がある上諏訪へと、家族全員で引っ越した。それから昭和十四年十二月までの約五年半、横溝は上諏訪で身を休め、回復の兆しが見えてからは「人形佐七捕物帳」などの時代小説にも取り組んでいった。

上諏訪で横溝が最初に住んだのは、駅を出て高島城へと向かう並木通りから、一本道を入った大手一丁目の所であった。諏訪は今でも湯量が豊富で、多くの家庭には温泉を引く機械が備え付けられているそうだが、横溝の家にも温泉があり、居ながらにして湯治ができた。また寝起きする二階の物干し台には、目隠しの板塀が巡らされており、肺病という当時「忌み嫌われる病気」（横溝正史『探偵小説五十年』講談社、昭和五十二年）持ちには好都合な造りになっていた。横溝も気に入っていた家だったが、昭和九年九月二十一日の室戸台風で板塀が吹き飛ばされ、起居が丸見えとなったためわずか三か月で退去となった。

次に住んだのは元の場所から諏訪湖側に少し移動した湖柳町であった。ここは一つの敷地に同じ造りの家が二軒近接して建てられており、浴場は共同で使うというシステムになっていた。場所柄、この共同浴場にも温泉が引かれていたのかもしれない。しばらくして片方の家が空き家となったが、なかなか次が埋まらなかった。横溝の肺結核で敬遠されたとみられ、大家から立ち退きを要求されたが、横溝が二軒とも借りることで解決した。

家賃の負担からか、乱歩が訪ねてくる前に、横溝は並木通りを挟んだ反対側、「上諏訪町大手町二ノ三〇一六」（『探偵小説五十年』前掲）の家に引っ越していた。この家は花柳界のど真ん中にあり、元々芸者を抱える置屋であったことから部屋数が多く、浴室には温泉であろう、お湯が常に沸いていた。この家の隣もまた置屋であり、周囲には料理屋が多く、必然的に近所づきあいも芸者や関係者が多くなった。大家も元芸妓であり、横溝と同じく胸を病んでいたことから、病に理解があり、事情を知った上で快く貸してくれた。板塀で囲われた屋根付き門のあるこの三番目の家が、乱歩の動画に見られる家である。

◆

「昭和十二年七月上諏訪ニ横溝正史君ヲ訪ネテ」（RF10-2）と題された乱歩の動画は、フランス製の9・5㎜カメラで撮影された。

旅の記録の始まりは、明治三十八年開設の上諏訪駅である。この駅は甲州街道側をメインエントランスとし、諏訪湖側に線路や操車場が置かれており、駅構内には、全国に類例のない温泉洗面所が設置されていた。映像では建物や人物の影がほとんど見えないことから、乱歩は八時に新宿を発って昼の十二時四十分に到着する名古屋行きの列車を利用したのだろう（「全国主要列車時刻表」『文藝春秋』昭和十一年七月）。

この旅に同行したのは、鳥羽時代からの友人、本位田準一である。初夏だというのに本位田や迎えに来た横溝とその家族、上諏訪駅に集う人々に半袖

姿は少ない。この時期の諏訪が、いかに過ごしやすかったのかがよくわかる。

その後、一行は商店街を歩いて行く。道幅や商店の多さから、現在の上諏訪駅前通り商店街と思われる。横溝の家は商店街を通り、途中少し逸れた所に位置していた。上諏訪は製糸業、醸造業などが盛んで、特に味噌は「信州諏訪味噌」と称し、関東や関西方面に広く流通していた。通りに見える「スワ味噌」などの電柱広告は、昭和十一年頃に激増した観光客を見越してのものだろう（『上諏訪』上諏訪町、昭和十二年）。

翌日、乱歩は船着き場から横溝夫妻と本位田と、四人で手こぎボートに乗り込み、諏訪湖に遊んだ。冬であれば、湖の結氷で出来る御神渡りの見物や氷上スケートなどを楽しむことができた。また諏訪湖の釣りでは鮒がよく捕れるが、横溝は転地した時に、不如丘から寄生虫がいるので生の鮒は食べないようにとの注意を受けていた。

ボート遊びを終え、桟橋を渡ってくる乱歩は首にタオルを巻き、カンカン帽に丸つなぎ柄の浴衣を着て、下駄を履いている（図1）。前々回、紹介した宮島の動画と同じくステッキを持ちながら、ニコニコとご機嫌に歩いてくる乱歩を撮影したのは、横溝か本位田かどちらなのだろう。いずれにせよ、気楽さと親しさが乱歩の顔に浮かんでいる。乱歩の装いは湯治客のそれだが、湖畔のすぐ近くには昭和二年竣工の温泉浴場、片倉館があった。

片倉館は浴場と貴賓館で構成され、前庭には噴水がある。乱歩の動画にも写っており、今も同じ風景を留めていることがわかる（図2）。

ステンドグラスで彩られた浴場の千人風呂は、洋風建築の浴場という珍しさが人気となり、当時も多くの入浴客に愛された（『健勝地高日本』高日本社、昭和十三年）。座ると溺れるような広く深い湯船で、立ち歩きで入浴を楽しめる。底には小石が敷き詰められており、自然と足つぼも刺激される珍しい温泉である。乱歩も観光で疲れた足を、この床を踏んで癒やされたことだろう。（もしくは痛くてつま先立ちでの入浴となったか）

浴場の二階には休憩室があり、そこから屋上の展望台に出ることができる。乱歩の動画で、煉瓦造りの出入り口付近を横溝と乱歩が肩を組んで出てくる場面や、横溝の子供たちが高台で遊んでいる場面があるが、それはこの片倉館屋上で撮影された。事前調査では片倉館入口と思われたが、現地に赴いた結果、屋上の窓や六角形の塔が映像と一致することを確認できた。窓上の照明が撤去されている程度で、噴水と同じくほとんど当時のまま残されており、当時の建築技術の高さを実感できる（図3）。

動画の終盤には、諏訪の芸者衆と酒盛りをする様子が映されている。楽しげな雰囲気だが、横溝の隣にいる芸者だけが、そっぽを向き、固い表情を崩さない。何かに気を取られているのかと思っていたが、横溝の病と当時の家の場所などを考慮すると、その理由が横溝が直面していた「忌み嫌われる病気」にあったことが、明るい宴席の影として表れている。

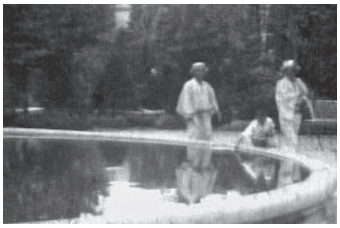
ちなみに諏訪と言えば御柱祭だが、七年に一度の祭事見物のため、乱歩は翌年の十月に再び横溝邸を訪れている。動画に残されていないのが残念である。

【乱歩の撮影場所】

上諏訪駅、上諏訪駅前通り商店街、大手二丁目横溝家前、諏訪湖ボート乗り場、諏訪の町中（薪置き場）、片倉館噴水、片倉館屋上、旅館布半

（武蔵大学助教）

【図3】片倉館屋上　2022年11月筆者撮影



【図2】片倉館噴水　RF10-2より

【図1】諏訪湖ボート乗り場　RF10-2より